神戸学院大学　ボランティア活動支援室

神戸学院大学では、ボランティア活動を通して学生の自主性、創造性および社会性をはぐくみ、地域社会へ貢献できるように支援をしています。
ボランティア活動支援室は、活動に関心はあるが、参加の仕方がわからないといった学生や団体に対して専門的なサポートをする、学生とボランティアを繋ぐ架け橋となる場所です。活動情報の発信や学生が参加しやすいプログラムを提供するなどして地域や社会への自発的な参加を促進することで、学生の新たな学びにつなげます。

有瀬キャンパス

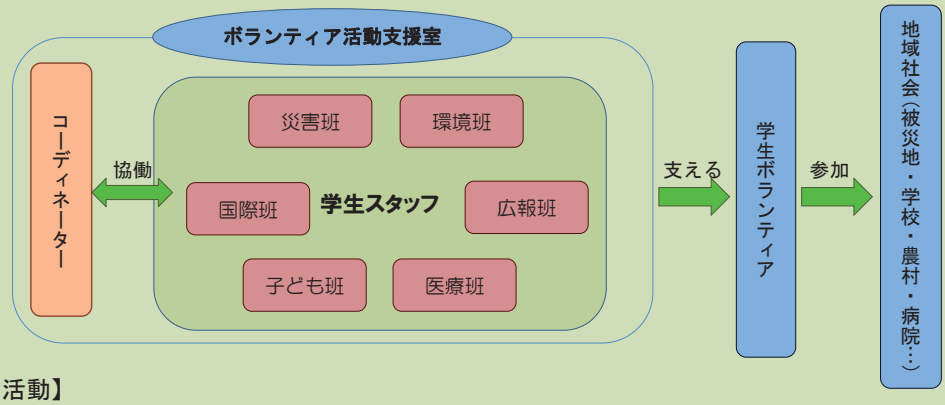
ポートアイランドキャンパス

開室日時
有瀬キャンパス（3 号館 1 階）
ポートアイランドキャンパス（KPC1・ B 号館 3 階）
月～金曜日　9：00～17：00（祝日は閉室）

募集情報
http://www.kobegakuin.ac.jp/support/volunteer

ボランティア活動支援室学生スタッフ ～学生による学生のためのサポート～

学生とボランティア活動をつなぐ学生コーディネーターの役割を果たしています。同じ学生の立場でサポートを行うことにより、活動をより身近に感じることができ、より理解が深まります。「参加」「相談」「企画」を三本柱に、取り組みテーマごとに「災害班」「子ども班」「環境班」「医療班」「広報班」「国際班」の６つの班に分かれ、学生ボランティアスタッフの立場で事業を企画・運営しています。



企画会議中の学生スタッフ

【主な活動】
- ○新入生ボランティアガイダンス　　○ボランティア活動のサポート（相談・情報提供など）
- ○ボランティア活動情報の提供（掲示物管理・HP・SNS 配信など）
- ○「サマーボランティア」「スプリングボランティア」および被災地応援ボランティアなどのプログラム企画・運営など

サマー＆スプリングボランティア

長期休暇期間を利用し、主にボランティア初心者の学生が参加しやすいプログラムの企画・実施をしています。大学が地域の団体などと相談し、20 程度のメニューを取り揃え、学生はその中から自主的に参加したい活動に申し込む形式となっています。毎回、学部や学年を超えた 100 名前後の学生が、医療、福祉、子どもとの交流、環境、まちづくり、被災地支援など多彩な現場で活動を経験し、成長しています。プログラムの前後には、研修会も実施しており、ボランティアの基礎知識や注意点を学び、活動後には感想や気づきをお互いに共有することで、自身のさらなるステップアップにつなげます。

【活動メニュー例】
- ・子ども・・・児童館での学習支援・大学キャンパスでレクリエーション
- ・福祉　・・・病院・高齢者施設での交流活動、障がい者お店の販売手伝い
- ・環境　・・・里山での棚田整備、農園での栽培、ごみと資源の分別啓発活動
- ・防災　・・・キャンパスで防災学習プログラム

神戸学院大学

ポートアイランドキャンパス
〒650-8586
神戸市中央区港島 1-1-3
TEL：078-974-1551（代）

有瀬キャンパス
〒651-2180
神戸市西区伊川谷町有瀬 518
TEL：078-974-1551（代）

被災地支援活動

―― 阪神・淡路大震災の思いをつなぐ　神戸の大学にできること ――

阪神・淡路大震災と東日本大震災、熊本地震

1995 年、阪神・淡路大震災によって私たちのまちは大きな被害を受け、震源地に一番近い総合大学である本学においてもその傷跡が大きく残りました。国内外からの支援を受け、復興の道を歩む過程で命の大切さや絆、思いやりや支え合いなど、多くの経験と教訓を学びました。

教育機関である大学は、何をなすべきか。教育や研究を通して、震災で失った地域コミュニティの復興や次なる災害への備え・防災教育を展開し、災害に強い街、災害に強い人づくりをしていくことではないかと考え、伝える・備える・生かす取り組みを行ってきました。そして 2005 年 4 月にボランティア活動支援室、2014 年 4 月に現代社会学部社会防災学科が開設されました。東日本大震災の被災地をはじめ、兵庫県丹波市、広島市（共に 2014 年）、茨城県常総市（2015 年）、そして 2016 年から熊本地震の被災地へ、2018 年は、西日本豪雨、2019 年には台風 19 号の水害被災地へと学生ボランティアを中心とする支援活動の経験を積み重ねています。これまでの被災地への送り出しは 146 回で、活動人数は学生 1509 人、教職員 241 人（2023 年 12 月現在）です。

東北での取り組み

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、地震発生の翌日に学長を本部長とする「災害支援対策本部」を立ち上げ、その一週間後には先遣隊を派遣しました。2011 年の夏休みからは、現地の社会福祉協議会、自治会等との連携のもとで、仮設住宅の生活向上につながる活動を実践、2017 年までに 92 回、975 人の学生を送りだし、現在も形を変えて継続しています。

- 仮設住宅周辺マップ制作（石巻専修大学との協働）
- 集会所を拠点に人が集う空間づくり/住民の方とベンチ・濡れ縁制作
- 仮設住宅の年末大掃除手伝い
- スタディーツアー　2018 年から東北の今を学ぶスタディーツアーを実施。コロナ禍で中断後、2023 年 9 月に再開、宮城県名取、石巻市の他、福島県双葉町の原子力災害伝承館を視察しました。学生は復興への長い道のりを実感しています。

阿蘇・熊本での取り組み

熊本地震被災地
（教育後援会・同窓会補助プログラム）

（熊本支援、瓦礫の片付け）

2016 年 4 月の地震で甚大な被害を受けた熊本県へ緊急支援ボランティア（計 6 回、学生 74 人）を行いました。

熊本県益城町、西原村、南阿蘇村での被災家屋、神社の片付け、避難者への足湯活動の他、後半は仮設住宅や農業支援活動など、現地の大学や NPO と連携して活動に取り組みました。 この活動では、本学の教育後援会や同窓会等から支援をいただき、春休みに実施した第 6 陣では、関西と九州支部の同窓生と共に活動しました。

2017 年度以降も活動を継続。内容は緊急支援から仮設住宅生活支援等へ移行。熊本の大学（熊本学園大学、九州ルーテル学院大学等）に協力をいただきながら進めてきました。コロナ禍で 2 年間中断しましたが、2023 年 2 月には、益城町の復興住宅交流（熊本学園大学）、南阿蘇村視察（東海大学）、阿蘇市のイチゴ農園お手伝い（熊本 YMCA から紹介）など充実したプログラムが実施できました。

被災地緊急支援

西日本豪雨被災地
（教育後援会・同窓会補助プログラム）

2018 年 7 月の台風 7 号により、西日本を中心に広い範囲で記録的な大雨となり、水害、土砂災害等が発生し、死者、行方不明者が多数となる甚大な被害をもたらしました。

7 月 21 日の第 1 陣（広島市安佐北区）を皮切りに、第 2 陣・3 陣・4 陣（いずれも岡山県倉敷市真備町）と緊急支援ボランティアを実施しました。

また、神戸でできる支援として、募金活動も実施しました。

令和元年台風第 19 号被災地
（教育後援会・同窓会補助プログラム）

2019 年 10 月 10 日から 13 日にかけて、台風 19 号により発達した雨雲や台風周辺の湿った空気の影響により、静岡県や関東甲信地方、東北地方を中止に広い範囲で記録的な大雨となり、水害、土砂災害等が発生。死者、行方不明者も多数となる甚大な被害をもたらしました。

11 月 1～3 日に長野市で、11 月 16～17 日と 12 月 7～8 日は宮城県伊具郡丸森町で被災家屋の泥かきや掃除などを行いました。

神戸での取り組み

被災地応援物産展

東北、熊本の物産を取り寄せ販売し、購入する方に現地の様子を伝えることも大切にしています。これまで 38 回開催し、今後も地域のイベントなどで継続していきます。

（被災地応援物産展）

キャンパスのある地域での防災活動
（学生・西区連携まちづくり活動助成事業）

2021 年度から、新型コロナウィルス感染拡大の中でも地域と連携してできる防災活動として、防災情報誌を発行し、3500 世帯に配布しています。

2023 年度には、キャンパス地域の小学生・中学生を対象に、「Let's 防災デイキャンプ」（神戸市西区と共催）開催など地域連携を深めています。

防災情報誌『いっせーのせ』

子ども達と大学生が学び合う
防災デイキャンプ

神戸学院大学

東北復興スタディーツアー

【日程】2023 年９月８日（金）～10 日（日）　２泊３日
【参加者】学生７名（法学部２名、心理学部２名、現代社会学部１名、栄養学部１名、
　　グローバル・コミュニケーション学部１名）　引率１名（ボランティア活動支援室職員）
【活動場所】宮城県石巻市、女川町、名取市閖上、福島県双葉町

私たちは『東北の今』を知るため、伝えるために
東北復興スタディーツアーに行ってきました。
2011 年大きな震災により壊された街並みや人とのつながり。
それから 12 年経った今を伝えます。

メンバーの声

現地に行くまで『東北は復興している』と思っていました。でも現地に行くことでまだまだ道のり半ばであることに気づかされました。

事前学習をして津波の高さや範囲は学んでいたものの実際にこの高さまで津波が来た、今立っている場所にも津波が来たというお話を聞くとどこか信じられない私がいました。

震災とは町の外観よりも人のつながりや内面を壊し、修復もまた、心の復興が倍以上かかることを学びました。

今回見て学んだことを未来の災害への対策に繋げることが私達にできることだと感じました。

１日目

日時：９月８日（金）
行き先：宮城県石巻市、日和山、伝承交流施設 MEET 門脇、震災遺構大川小学校

【最大の被災地】と呼ばれたほど多くの被害を受けた石巻市。
生き延びた方の被災体験、そして助かることが出来なかった場所を見て
あの日何がおきたのか、備えの大切さを学びました。

あの日、学校の生徒をはじめ住民の方々が避難した日和山。
偶然お会いした地域住民の方々が石巻市について、
そして被害について語ってくれました。
しかし、このように見知らぬ人に震災経験を話すことが出来る人は極少数です。今も圧倒的な数の人が心に傷を抱え、後ろ向きに思う人が多いとのことでした。

当時小学６年生だった語り部さん。
当時言えない雰囲気のせいで話せなかったことも、７年経ちようやく語り部として話せるようになったそうです。現在は児童館の職員として石巻に住む子供たちの支援を行っています。
災害時こそ子供たちが言いたいことを言える関係をつくるために…

あの日川と陸から遡上する津波によって、全児童の７割と教職員が亡くなりました。自ら命を守る行動を選べなかった子供たちは、津波が来るまで１時間の間どんなに怖かっただろうか、そう思いました。
学校の横には２分ほどで登れる山がありました。

神戸学院大学

東北復興スタディーツアー

2日目

日時：9月9日(土)
場所：宮城県女川町，震災遺構　旧女川交番、シーパルピア女川、名取市閖上、閖上中央集会所、名取市震災復興伝承館、閖上 日和山、みちのく潮風トレイルセンター、名取市震災メモリアル公園、名取市閖上小中学校

2 日目は地域の方々からお話を伺う機会が沢山ありました。お話を伺う場所が違っても、皆さん同様に「震災前とは違う」とおっしゃいます。そんな今のお気持ちを聞けたことにとても大きな価値があったと感じ、それと同時に心の復興がまだまだ課題となっていることを学ぶことができました。

旧女川交番の展示には町民１人１人が幸せを取り戻した時が【復幸】と書かれてありました。しかし同展示には『復興から取り残されている人が多いか』という質問に対し、75%の方が「そう思う・ややそう思う」と回答しました。今ではきれいな建物が建ち並び、街の復興が進む女川町ですが、まだ心の復幸は終わっていません。

沿岸部に位置する閖上。最大約 15 メートルの津波に襲われ街のほとんどが破壊されました。
今は防潮堤を建てる変わりに土地全体が嵩上げされています。

閖上町の方々にお話を伺った際に、「震災によって人も変わってしまった。もし今再び震災が起こったら、昔のように声を掛け合って逃げるのではなく一人で逃げるだろう」と話されていました。新たに建てられた復興住宅が住民同士のつながりを減らす要因になってしまっています。

3日目

日時:9月10日(日)
行き先:福島県双葉町、東日本大震災・原子力災害伝承館

福島県は唯一未だに仮設住宅が存在します。そのことを皆さんはご存じでしょうか？

学生スタッフが福島県に行くのは今回が初めてでした。
ニュースで見聞きしていた福島と現実には大きなギャップがありました。
移動中の車の中から見た帰還困難区域となった地域は
想像を絶するものばかりでした。

原子力発電所が爆発する前は原発反対の風潮ではありませんでした。
原子力発電所が双葉町に出来たおかげで、人口増加、住民の収入増加に繋がり暮らしを豊かにしました。学校での発電所の体験学習、
広報誌「アトムふくしま」の発行など住民にとって原子力発電所は
身近な存在であるのが展示物に表されていました。

私達に話をしてくれた語り部さん。現在を含め 12 年間、
海を見ることが出来ていません。
復興について「今も災害は続いている。私たちは原子力災害を飲み込みながら生活しています」と涙ながらに語っておられました。
１２年経っても放射能という見えない恐怖が不安を生んでいました。

帰還困難区域となった双葉町の住宅です。
屋根が崩れ落ち、家の内外共に木が生い茂っています。住民の皆さんはあの当時、一週間程度で家に帰れると思っていたはずです。
今も手が加えられていない地域を見るとこれで復興したといえるのだろうか、そんな思いがこみ上げてきました。
一度皆に見てほしい、そう思いました。

神戸学院大学